

## 異文化交流実践を授業へフィードバック

松浦 まち子 ・ 浮葉 正親 ・ 田中 京子

### I. 基礎セミナー A (前期)「多文化社会を生きる」(代表:松浦まち子)

#### 1. 授業のねらい

外国文化を持って日本で暮らす人々に焦点をあて、彼らの視点を通じた日本を知ることによって、日本社会の課題に気づき、様々な文化を持つ人々が共に生きることについて考える。

#### 2. 受講者及び講師

受講生は12名(内訳:文3名,教1名,法1名,経1名,情1名,理1名,工4名),TAは国際言語文化研究科博士前期課程のトリアスティン エフゲニーさん(ロシア)にお願いした。ゲストスピーカーとしてDr. M. Farooq氏(名古屋学芸大教授,5/15),細谷静子氏(日系ブラジル人,5/22),金栄一氏(在日韓国人,5/29),稲垣達也・アイダご夫妻(6/12)に参加してもらった。平成20(2008)年度は,浮葉正親,高木ひとみ,松浦まち子(代表責任者)の3名が担当した。

#### 3. 授業内容

##### 3-1 スケジュール

- 4/17 オリエンテーション,他已紹介
- 4/24 体験した異文化について発表する,異なる文化を持つ隣人について調べよう
- 5/1 ロシアへようこそ(TAの出身国の文化を学ぶ)
- 5/8 異文化疑似体験
- 5/15 ゲストスピーカー「イスラムの人々と文化」
- 5/22 ゲストスピーカー「日系の人々と文化」
- 5/29 ゲストスピーカー「在日の人々と文化」
- 6/12 ゲストスピーカー「国際結婚した人々と文化」
- 6/19 レポートを書く時の留意点と文献検索方法,グループ分け,発表準備
- 6/26 発表準備,発表の順番決め

7/3 発表準備

7/10(+補講)発表と討論(3グループ)

7/17 発表と討論(2グループ),まとめ,授業アンケート

##### 3-2 口頭発表テーマ

- ・ムスリムとして生きる
- ・日系ブラジル人のアイデンティティ
- ・国際結婚の現状
- ・在日韓国人と日本社会
- ・イスラムの食べ物

#### 4. 評価

今年度はゲストスピーカー4名に謝金を支払うことができ,いつもボランティアでお越しいただいていたことに対する胸のつかえが取れた。ゲストスピーカーの話に関して,質疑応答時の学生は,事前に関連資料を読んでくる宿題を課しているにもかかわらず,どちらかと言えば,内容が多すぎたのか,未知の世界だったのか,あっけにとられている感じでありあまり反応がなかった。しかしながら,毎回宿題として課している「感想・意見など」には,しっかりした意見が書かれており,与えられた内容をすぐに消化できなくても,強いインパクトをもって受け止めていることが理解できた。今後も,この地域に生きる多文化を持った人々を招いて,学生が多文化共生について考える機会を与えたい。

#### 【参考】学生からのコメント(アンケート自由記載欄より抜粋)

- ★ さまざまな文化を持つ人の話が聞けて本当に自分の視野が広がったと思います。これからもいろんなことに目を向けていきたいです。
- ★ 多くのゲストスピーカーを迎えて話を聞く授業が面白かった。普段なかなか接しない人たちだったのでいい機会になったし,知っているつもりで知らなかったことも多く学べてよかった。
- ★ アットホームな雰囲気の中,さまざま国の違っ

た境遇の人から、今まで自分が知らなかった世界の話が聞けて、とても勉強になりました。新しい視点が備わったのではと思います。

★ とても興味深く楽しい授業でした。後期に授業がないのが残念です。

★ 授業すごく楽しかったし、いろいろな人の話が聞けて勉強になりました。今まで知らなかった問題がたくさんあることがわかりました。大学在学中や社会に出てからこの授業で会ったような人々に会う機会が増えると思うので、この授業で終わりではなく、これからもっと考えていかなければいけないと思いました。

## Ⅱ. 教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」（代表：浮葉正親）

### 1. 授業のねらい

外国人留学生と日本人学生が討論や協同作業を通じて、両者の日本に対する理解と相互の理解を深めることを目的とする。名古屋大学内およびこの地域で異なる文化を持つ人々が共に学び生きることの意味を考え直し、多文化共生のあり方を模索する。

### 2. 受講者及び講師

学部生は24名（名大生21，他大学生3）。受講生の学部別内訳は、文学部4，教育学部4，法学部4，経済学部6，工学部3である。これに10月に渡日した日本語・日本文化研修生20名（中国5，韓国3，ベトナム3，インドネシア2，インド1，モンゴル1，ウクライナ1，スロバキア1，スロベニア1，ロシア1，ポーランド1），日韓共同理工系留学生6名，短期交換留学生8名（韓国3，台湾2，インドネシア1，アメリカ1，カナダ1）を加え，日本人学生24／留学生34，計58名で授業を行った。

平成20（2008）年度は，浮葉正親（代表），田中京子，松浦まち子，堀江未来，高木ひとみの5名がこの科目を担当した。全15回の授業内容と担当は以下のとおりである。

### 3. 授業内容

#### 3-1 スケジュール及び担当者

10／6 オリエンテーション（1）（全員）

10／20 オリエンテーション（2）（全員）

10／27 異文化との出逢い（田中）

11／10 留学生と日本社会（松浦）

11／17 グループ活動について（堀江，浮葉，高木）

12／1 グループ発表準備（全員）

12／8 グループ発表準備（全員）

12／15 グループ発表と討論（全員）

12／20 グループ発表と討論（全員）\*

12／22 グループ活動から学ぶ（高木），レポート提出について

1／19 多文化社会について考える（堀江）

1／26 まとめ

\*補講：2コマ連続

#### 3-2 グループ発表のテーマ

グループ1：日本人の「内と外」—服装と親密度の違い—

グループ2：日本人の時間感覚について

グループ3：日本人って…あんな人？こんな人？どんな人？—日本人に対するステレオタイプ—

グループ4：ドアの開け方と心の開き方

グループ5：まちウケるぎゃるの発表

グループ6：日本の電車ってすごくない？

グループ7：異文化衛生

グループ8：一人でいること

グループ9：名前の付け方

#### 4. 評価

昨年に引き続き，グループ活動に対する評価を重視し，全体の40%（発表30%＋自己評価10%）とした。その他は，レポート30%，出席15%，クラス討論への参加度15%（10%は自己評価とした）である。グループ発表に対する評価は，五つの評価項目を作り，5名の教員による評価を15%，他の学生による評価を15%とした。結果的には，どのグループも積極的に発表に取り組み，22～27%を獲得した。発表のなかにはインタビューやアンケートによる調査の結果をパワーポイントにまとめたグループも多く，全体に工夫が感じられた。レポートについては，レポートの採点基準や採点方法について再検討しなければならないと感じている。

以下は，最終日に学生たちが提出したアンケートの自由記述の抜粋である。

- ★ 自分が当たり前と思っていた常識が当たり前ではなく、いろいろな場所にいろいろな文化があって、「世界」を実感することができたと思います。そして、自分が知っている範囲って本当に狭かったんだと痛感しました。留学生とも仲良くなれて本当によかったです。
- ★ 私は日本人相手には人見知りで、フレンドリーな外国人なら人見知りにならずに済むかなと思っていたが、まったく違った。むしろ、日本語に慣れていない留学生と関わっていくためには、自己主張をしなければならない。相手の思うことを聞こうとしなければならない。環境や周囲の人々に感化されて自分を変えることができる、ということもあるかもしれないが、それらはいくまでも「きっかけ」であって、自分が努力して自分を変えていくべきだと思った。
- ★ 私はこれまであまり日本人と話す機会がなかったけれども、この授業ではたくさん話せたので本当に良かった。日本人に対しては消極的に見えるとか、話が合わないと思ってしまうことが多かったけれど、実際に話してみたら違うということに気がついた。文化の違いだけでなく、個人差があるんだということも学ぶことができたと思う。(留学生)

今年度は、愛知県下の大学の単位互換協定に基づき、他大学から3名が初めて受講した。全員出席率もよく、授業への取り組みも積極的であった。

### Ⅲ. 大学院授業「異文化コミュニケーション論 a/b」: 国際言語文化研究科 多元文化専攻メディアア プロフェッショナルコース (担当教員: 田中京子)

2003年度に国際言語文化研究科日本語文化専攻で開講した科目「異文化接触とコミュニケーション」を、現在は同研究科の国際多元文化専攻メディアアプロフェッショナルコースで「異文化コミュニケーション論」の授業として継続開講している。今年度からは前期と後期を分けて開講したため、前期と後期の参加者が多少異なった。異文化コミュニケーションの理論と実践を核として少人数セミナー形式の授業を進めた。

#### 1. 授業のねらい

母語や背景となる文化が異なる人たちが、意思疎通

をはかりながら共に生活しようとする時、どんな創造や衝突があるか、文献購読や経験学習、討論を通して考え学ぶ。

コースの中では、共通言語として主に英語を使用し、話し合いや実習を行うことによって、言語能力が様々な人たちの間のコミュニケーションの特徴を実体験し、積極的に公平なコミュニケーションについて考察する。

#### 2. 参加者

国際言語文化研究科・国際開発研究科・教育発達科学研究科の大学院生と研究生、および聴講生と、TA、担当教員の約10名で毎回進め、必要に応じて学内外の学習支援者の協力を得た。年齢50歳代から20歳代までの男女、出身はインド、モンゴル、中国、ヨルダン、日本で、英語と日本語の運用能力も様々な学生たちが参加し、他の協力者がいる時にはさらに多様なメンバーとなった。

#### 3. TA: 工学研究科 D2 Salah Aljbour さん

TAは、ヨルダンで生まれ育ち、オランダで大学院修士課程を終え、日本で博士課程を履修している大学院生が担当した。工学が専門であっても、文系科目にも強い関心がある学生で、異文化コミュニケーションの理論について自ら熱心に学習し、経験も活かして授業での学生指導に役立てた。出席確認・討論参加の他に、学生が毎回宿題として英語で書くレポートの添削補助を行ない、毎回の授業の反省と次の授業の準備を担当教員と共に行なった。TAの補助は、参加者全員にとってたいへん大きな支援となった。

#### 4. 授業内容

##### 【前期】

- (1) 異文化間コミュニケーションに関する疑似体験学習と振り返り
- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 文献購読 (宿題)
- (4) 文献についてのレポート (宿題, 英語で執筆)
- (5) 文献についての討論
- (6) 試験 (事例解釈)

##### 【後期】

- (1) 異文化コミュニケーション理論まとめ

- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 文献購読（宿題）
- (4) 事例作成，発表，討論
- (5) 試験（レポート形式）

ジェンダーとコミュニケーションをテーマとした授業には名古屋大学セクシュアル・ハラスメント相談所のスタッフが支援者として参加した。宗教とコミュニケーションのテーマでは、TAが中心となって調整し、名古屋モスク訪問も行った。

参加者間に生まれるコミュニケーションの実践の中では、参加者全体が積極的にコミュニケーションしようとする姿勢を見せ、言語運用能力の差も、時には日本語や中国語も使用して補いあいながら、落ち着いた雰囲気の中討論や発表を行なうことができた。昨年度と異なり、宿題の提出などについて持続性に欠ける学生もいたが、討論には積極的に参加していた。今年度は、前期と後期でコースが分かれたため、全員で論文集を作るなど、成果を形にするという余裕がなくなってしまったのが残念である。

## 5. 課題

教員はこれまで行ってきた国際交流関連業務や留学生相談の中で培った異文化コミュニケーションに関する経験や知識を、個別教育（相談）だけでなく授業の中でも生かすべく積極的にとり組んだ。逆に、この授業を個別教育に還元して相談活動を発展させることも意識している。個別教育と集団教育、教育と研究の接点として、このセミナー式授業を大切に考えている。

今年度の参加者は、昨年度と全く異なり、学習への取り組みは様々で、時に欠席があったり、宿題の提出が遅れたりする学生がいた一方、熱心な人は授業後にも意見や感想を寄せたり、課題以外にもレポートを提出したりした。全員が心を開いて発言できるという特徴を持ち、コース終了後も友人として付き合いを続ける学生もあり、異文化コミュニケーションの積極的側面を体験できた。逆に、葛藤や摩擦についてはあまり実体験できなかったかもしれない。今後さらに多くの文化圏から様々な学生が参加することによって、挑戦度の高いコースとなるであろう。

使用した教科書がオランダ出身の著者によるもので、TAがオランダ文化に詳しくあったため、内容の理解に深みが出た。文献にも背景となる文化が色濃く表れていることが実体験できた。今後も、教科書以外にも様々な文化圏発の文献を探して使用したい。